蔵前工業会関西五支部午餐会
平成28年3月1日（火）

着物の歴史と着付けの基本

着物の歴史
着物の着付けの基本と種類

会員同伴者
土井真理子

本日は、着物の歴史と着付けの基本について簡単にご説明させていただきます。
私は箕面市立保育園の保育士をしていますが、京都着物学院に4年ほど通い、
日本和装協会の講師資格を取りましたので、そういった経験をもとに話をさせていただきます。

最終 P39/39 に、質疑応答(No.1～８) の記載あり

2.（着物の歴史…基本）まず着物の歴史ですが、 現在の着物の基本は、平安時代にできました。
それ以前の古墳時代、飛鳥、奈良時代にはよく絵で見るような、中国伝来の筒袖のブラウスとズボン。
女性の場合はスカートのようなものを身につけていました。現在の洋服に似ています。894年に菅原道真の建議で
遣唐使が廃止され、それ以降日本独自の和風文化が発展することになりました。

着物の歴史

平成	昭和	大正	明治	江戸	安土桃山	戦国・室町	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	古墳	
19 45			18 67			15 14 48 67		79 4				
終戦			明治維新	京友禅の出現		西陣織の始まり 応仁の乱		小袖の出現	遣唐使の廃止			

「直線裁ち」で重ね着のできる「小袖」とよばれる着物ができたのが平安時代で、以来基本的には今日の着物の原型と
なっています。直線裁ちの着物は、簡単にたため、また寒い冬には重ね着ができ、また暑い夏には麻などの涼しい材料が使え、
その便利さから日本人の生活の中に根をおろして行きました。
これ以来、基本的には小袖のデザインは変わらず、明治の開国から、太政官令で男子公務員は洋服着用が義務ずけられました。
当時女性はほとんど着物でしたが、太平洋戦争をへて戦後復興、高度成長になるにつけ、女性も動きやすい洋服を着るように
なりました。現在では、着物の着用は冠婚葬祭などのイベントのときなどに限られます。
後で説明します先染めの代表の京都に西陣織ができたのが1548年です。
あと染めの染色の染め物友禅が扇絵師の宮崎友禅斉により開発されたのが江戸時代の元禄時代です。

3.ここで基本的な着物の作り方について説明しておきます。

着物の作り方材質と染色

		天然繊維				化学繊維		
		木綿	絹	麻	ウール	レーヨン	アクリル	ポリエステル
先染め（織物）		絣						
		西陣織						
		紬						
	刺繍							
	摺箔							
後染め（染物）								
		友禅						

横軸が材料で、天然繊維には
木綿、高級着物の絹、夏涼しい麻、などがあります。
安くて丈夫な化学繊維が開発され、
レーヨン、ポリエステル、アクリル、などがあります。

縦軸は染め方で、「糸の段階で先に染めておく織物」としては、京都の伝統工芸品の西陣織、他に絣、紬などがあります。
高級な着物には、「刺繍」、「摺箔」などの技術もあります。
西陣織のルーツは、古墳時代からありますが、平安時代に朝廷が京都の西陣に着物職人を集めて着物を作らせたのが始まりです。
安土桃山時代の応仁の乱の後、京都の「舎人組」が足利から営業権を譲り受け、事業化したのが始まりです。
法律で伝統工芸品に指定されています。
生地の段階で染める後染めの染め物としては、伝統工芸品の京友禅、加賀友禅、東京友禅などがあります。

着物の装いの早覚えとして、
「正装は染めの着物に織の帯」、
「趣味着は織の着物に染めの帯」
という言葉があります。

4.次に染料について説明しておきます。

染料の種類

天然染料 草木染め	赤系	茜、紅
	紫	紫紺、蘇芳
	黄色系	刈安、キハダ、梔子、ウコン
	青	藍
合成染料 化学染料	紫	アニリン(1856)
	アカネ	アリザリン(1869)
	藍	インディゴ(1880)

染料には
「草木染めの植物の天然染料」と、
「化学染料」があります。
植物染料はここに示しますように、赤には茜、紅、紫にはしこん、すおう、黄色は刈安、きはだなどが使用されます。

化学染料は合成染料とも呼ばれますが、1856年にイギリスの化学者ウィリアム・パーキンが
アニリンからモーヴと呼ばれる化学染料を開発したのが始まりで、
今では天然染料より低コストの化学染料が主体となっています。

小袖

5.これが平安時代に開発された小袖です。
現在の着物とよく似ています。

西陣織

6.西陣織の例です。
西陣織とは京都の伝統工芸品で、京都の西陣で織られる綾，錦、繻子（しゅす）、緞子（どんす）、などです。

西陣織

7.これも西陣織です。
都踊りの衣装です。

京友禅の例です。

8.これは京友禅の例です。
京友禅とは、京都の伝統工芸品の一つで、元禄時代に扇絵師の宮崎友禅斉によって考案された染色絹織物などです。

9.これは見にくいですが、日本各地の着物の産地を表しています。

西陣織、京友禅、久留米絣、大島紬などは有名です。　　…別添資料につづく

年中行事

結婚式
お葬式、法事
お茶会、パーティー

お宮参り
七五三
成人式・卒業式

10.着物を着る年中行事の例です。
結婚式では、新婦は白無垢を着ます。白は新しい出発を意味する色です。
参列する女性は留袖を着用します。

11.（着付けの基本）次に着物の種類についてご説明いたします。

着物の種類（女性）

留袖はミセスの第一礼装です。
全体が黒の黒留袖と、
黒以外の色を使った色留袖があります。
黒留袖は結婚式、お葬式など格調を
重んじる場合に着用します。
色留袖は披露宴、祝賀会などに
幅広く着用できます。

留袖｛色留袖、黒留袖）　正式な礼装

訪問着　正式な礼装

つけ下げ　戦時中訪問着の代用

小紋　カジュアルな外出着

振袖　未婚女性の晴れ着

浴衣　夏祭りなどの外出着

男性用の着物

訪問着は、ミス、ミセスを問わず着用出来る社交着です。
「つけ下げ」は訪問着に次ぐ格の高い服装です。戦時中、派手な訪問着が陸軍により規制されたのに女性が反発し、訪問着の華やかさを少し抑え、訪問着の代わりに着用するために開発されました。
振袖は未婚の女性の最高の礼装で、華麗な絵羽模様と長い袖が特徴です。
小紋は外出着、街着として気軽に年代を問わず着用できます。

12.女性の着物のルールとしては、冠婚葬祭の礼装用と、礼装以外の普段着とがあります。

女性の着物と格

礼装の着物 (冠婚葬祭)	正礼装	黒留袖、振袖、喪服など
	準礼装	色留袖、訪問着、色無地など
	略礼装	色留袖、訪問着、つけ下げ、江戸小紋、色無地など
礼装以外の着物	外出着	小紋など
	街着	紬など
	家庭着	ウールの着物、浴衣など

格式を重んじる結婚式などの正礼装としては結婚式では黒留袖、乾坤式の花嫁さんはや成人式の書生は振袖、お葬式や法事などの不祝着には喪服が一般的です。

披露宴、パーティーなどの準礼装では色留袖、訪問着、色無地などが一般的です。

外出着としては、小紋、紬などが一般的です。
夏祭りなどでは浴衣を着用します。

13.着物のアクセサリーとして、帯、足袋、草履、ショール、手提げバック帯紐、などがあります。コーディネーションに気を使います。

着物のアクセサリー

着物	
下着	
帯	
足袋	
草履	
コート	
ショール	
手提げバッグ	
帯ひも	
髪型	
羽織	
袴	
お化粧	

春先は淡い色の明るい薄い色の着物、秋日は深い青などの色が良いとされえいます。

14.左が留袖、右が色留袖です。

黒留袖
ミセスの第一礼装。結婚式、お葬式などの格式の高い場所で着用される。

色留袖
披露宴、などの席で幅広く着用されています。

訪問着
胸、肩、裾に華やかな絵柄が入ります。パーティー、お茶会などに着用します。

色無地
地紋のある生地に黒以外の色を染めた着物です。

15.訪問着はミス、ミセスを問わず着用できる社交着です。
胸、肩、裾に大きな模様が入ります。
パーティー、お茶会、などに着用します。

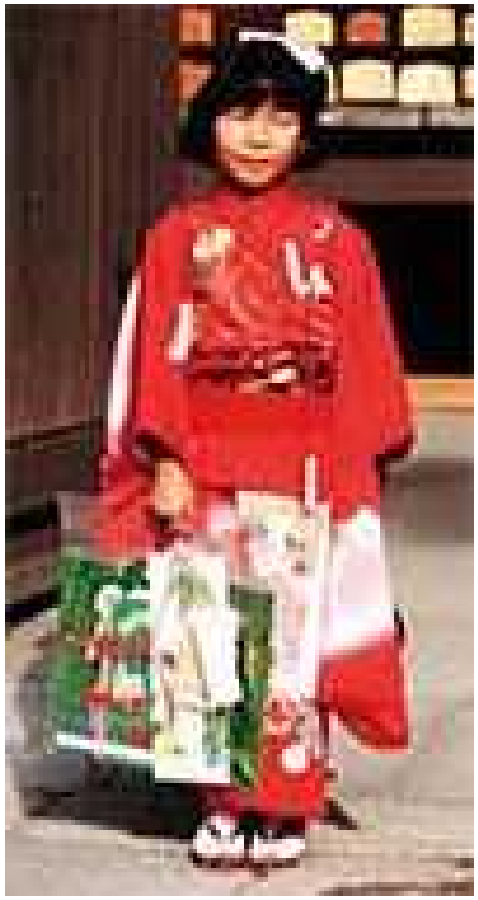
小紋
カジュアルな外出着、街着です。

紬

15.訪問着はミス、ミセスを問わず着用できる社交着です。
胸、肩、裾に大きな模様が入ります。
パーティー、お茶会、などに着用します。

喪服

17.お葬式などの不祝儀に着用する、黒を主体とした。着ものです。



お宮参り
生まれて30から100日の間に近くの神社に報告します。

18.生まれて30日から１００日の間に近くの神社に報告します。
女の子は友禅の着物、男の子は黒い紋付を上に重ねます。

19.これは若い女性の晴れ着の振袖です。
　振袖は、見頃と袖の縫い付け部分を少なくして
「振り」を作った袖を持つ着物です。

現代では、若い女性の黒留袖や色留袖や訪問着に相当する
格式の礼装です。

振袖
独身女性の晴れ着です。

20.カジュアルな服装として、紬は大島紬などが有名ですが、先に染めた生地を縫い合わせて仕上げる丈夫な普段着です。

綿やデニムの和服は重くなるので、夏以外の単衣に着用する普段着です。

紬

絹織物の一種で一般的には糸を染めてから反物に織り上げます。先に糸を染め、その色の組合せにより縞や格子などの模様を織り出します。ざっくりとした風合いが魅力です。

デニム・木綿

綿やデニムのきものは、裏を付けると重さで着づらくなる事と、お手入れが気軽に出来なくなる事から、単衣仕立てにする事が多い着物で、夏以外の３シーズン着用ができます。
※写真はデニム着物です。

浴衣

木綿生地に染めをほどこし、単衣（ひとえ）に仕立てたきものです。もとは湯上りに羽織った物なので、浴衣で出かけられるのは夏祭りや夕涼みなど気取らない場所に限られます。

紬、デニム、浴衣

浴衣は木綿生地に染めを施し、単衣に仕立てたもので、もともとは湯あがりにはおったものです。
夏祭りなどに着用します。

男性の着物と格

礼装の着物 {冠婚葬祭)	正礼装	紋付き羽織袴
	準礼装	紋付き羽織+長着
	略礼装	
礼装以外の着物	外出着	羽織+長着、長着
	街着	
	家庭着	ウールの着物、浴衣など

21.男性の和服は礼装では「紋付き。羽織。袴」　が正式な礼装となっています。
略礼装、外出着としては羽織+長着（または、長着だけ）となっています。
男性の着物、長着は無地の地味な色のものとなっています。

夏まつりなどでは男性も浴衣を着ます。

22.これは男性の礼装、羽織、袴、長着です。

男性の着物
羽織、袴、長着

23.帯の種類はたくさんありますが、女性の礼装では、お太鼓結び、二重太鼓が一般的です。
浴衣には蝶ちょ結びなどをします。

帯の種類と結び方

- お太鼓
- 二重太鼓
- 貝の口
- 蝶矢

24.お太鼓結び、二重太鼓が一般的です。
男性では貝の口が一般的です。
浴衣では蝶ちょ結びなどが一般的です。

お太鼓結び、貝の口、
蝶々結び

能舞台

25.これは能舞台の着ものです。

江戸時代の武士は、糊づけした羽織、袴などを
正装として着用していました。

お茶会

26.お茶会では訪問着、色無地、つけ下げなどを着用します。

27.上は観劇などの女性の着物姿です。

下の夏祭りなどでは浴衣を着用します。

浴衣

日本の服装の歴史

29.古墳時代日本人は、男性は上は短い袖付きの服、下はズボンを、女性はロングスカートのようなものを着ていました。
筒型の衣服に小袖がついたもので、着物というより現在の洋服に近いイメージの衣服です。

古墳時代
中国伝来のブラウスに男性はズボン、女性はスカートの服装

飛鳥、奈良時代
聖徳太子の時代、中国の唐の文化の影響を受け、衣服令により、身分階級により、礼服、朝服、制服がきめられた。

30. 7世紀になると、大陸の唐の文化が遣隋使、遣唐使により伝来し、衣服についても９世紀末の遣唐使の廃止まで大陸の影響を受けるようになりました。
女性の服装は、ロングスカートとなり、比較的ゆったりした服を着るようになりました。
聖徳太子の「冠位十二階」により、身分により　「礼服、朝服、制服」などの衣服が定められました。 P.30

十二単などのゆったりした、華やかな重ね着の和服が
着られるようになりました。
お公家さんは男子は装束、女子は唐衣裳装束などを着用していました。

平安時代
奈良時代の衣服が引き継がれるとともに、日本独自の華やかな和服が発展しました。

31.９世紀になると、遣唐使が廃止されましたが、
当初は奈良時代の衣服が引き継がれましたが、
次第に日本独自の和服が確立されました。
「直線裁ち」という形が採用され、体型にかかわりなく着れるようになり、たたみやすく、夏涼しく、冬は重ね着ができ、
便利な今日の着物の原型が確立されました。
袖口を縫わない「大袖」といわれる袖を来るようになりました。

32.鎌倉室町時代の衣服の中心は、武家男子は直垂（ひたたれ）、女子は絹袴を着用、スライドは大原女の服装です。
大原女は頭に柴を乗せて売り歩いていました。

室町時代

安土・桃山時代

33.鎌倉時代、室町時代、戦国時代という長い戦乱の時代が終わり、世の中が落ち着くにつれ、
中国や諸外国からの染色技術、染織技術が伝わり、華やかな衣服の文化が発展しました。

34.300年の鎖国の時代ですが、庶民階級が政治経済の面で勢力を発揮した町人文化の時代でもあります。
江戸後期には、帯締め、帯揚げを用いたお太鼓結びを着用するようになりました。

江戸時代
武士の制服というイメージで着物の染色、染織技術が発展した。

男性の全国の藩の制服として　糊で肩を固めた裃（かみしも）、袴（はかま）が作られ技術が進歩しました。

35.欧米化により洋服が入ってきて、混乱した時代ですが、
明治政府は「衣服令」を出し、公務員の男性には洋服の着用を
義務付けました。
一般の庶民には、男女とも正式の礼装として家紋の入った紋付き、
袴を正式な礼装となりました。

明治時代
開国により欧米の洋服が定着しました。

これまでの和服の伝統も維持されました。

大正時代

36.大正時代には女学生の間で袴姿が流行しました。
　　これが日本文化として定着し、現在でも卒業式・入学式などで袴を正装の一部として好んで着用されています。

37.戦前は戦争の影響を受け、男性は国民服、女性はモンペなどを
着ることになりました。基本的に男性は洋服、女性は和服です。

戦後は男女とも欧米の洋服が主体となりましたが、
和服は結婚式、お葬式、成人式などの年間行事のイベントなど、
格式を重んじる場所で、着用されるようになり今日に至っています。

大正、昭和・平成時代
洋服主体ですが、和服は結婚式、
お葬式、成人式、夏まつりなどの
イベントで着用されています。

38.以上述べたとおり、着物は日本の伝統として独自に発展し、
現在でも結婚式、お葬式、パーティー、夏まつりなどのイベントの衣服として定着しています。

ご清聴ありがとうございました。

終わり

【質疑応答】

Q1： 男性の着物について、付属品があるか？

Ans1： 女性の和服と同様に多種類あります。帯・草履・足袋など…

Q2： 日本では『着物』マーケット全体縮小して、衰退を懸念する。これからどうなるか？

Ans2： 外国では新しいマーケットができている国もある。どうなるか？ある意味、楽しみでもある。例えば、藤原さん(講演助手)の妹さんは英国で和装振興の仕事に携わっています。

Q3：京都市内では外国人の着物を、多く見る様になった。どこでどのように着用しているか？

Ans3： (各)ホテルそれぞれのリースシクミが整備されている。また、祇園等には、そうした観光 Shop が多数できている。

Q4：着物を着ているとき、意外に寒くないことに気づく。ナゼか？

Ans4： 着用した和服は巻基本的にき筒状態で重ね着であり、意外に断熱・保温性がある。外套・ショールなどの防寒対策も奏功。

Q5： 『江戸小紋』はカジュアルと言われる。『小紋』は 街着 とされている。どう違うのか？

Ans5： もともと、小紋は街着である。訪問着が派手すぎ、いっぽうで色無地には柄がなく物足らない。そこで、上品な柄の小紋が略礼装としてお茶会などでの着用が認められている。

Q6： 和服はどのように仕立て（縫う）られるか？手縫いに限られるか？

Ans6：基本的に手縫いで作られることが原則である。但し、浴衣はミシン(機械縫い)で仕立てることもある。

Q7： 実のところ、和装は(着)難しい。この和服生地を他の用途に使えないか？（知人で洋服にしている人が居る）

Ans7：できるだけ和服で着用したい。洋服仕立ても考えられるが、さらに着用以外の用途（例えば小物装飾品、インテリア品など）にも活用することを進めたい

Q8： 羽織を見ることが少なくなった。このまま廃れてしまうのか？

Ans8：羽織（普通のもの）は確かに（社会環境の変化で）少なくなったが、道行き(コート)などの使い方でそれなりの流行・ファッション性がある。コーディネートして使える衣装であり、充分に活用可能なものです。

以上